

アトサヌプリの火山活動解説資料（令和6年1月）

札幌管区气象台
地域火山監視・警報センター

火山活動は概ね静穏に経過しており、火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められません。
噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○活動概況

- ・噴気など表面現象の状況（図1-①～③、図2）
監視カメラによる観測では、F1及びF2噴気孔群の噴気の高さは400m以下で経過しており、噴気活動は低調な状態です。
- ・地震及び微動の発生状況（図1-④、図3～4）
アトサヌプリ西側では一時的に地震が増加し、日回数は12日が20回、13日が41回でした。これらのうち震度を観測した地震が5回発生し、最大の震度を観測した地震は13日15時55分にアトサヌプリの西約5kmで発生したマグニチュード4.0の地震でした。この地震により弟子屈町サワチサップで震度4を観測しました。アトサヌプリ西側では、2021年以降、時々地震活動がまとまってみられています。
アトサヌプリ（硫黄山）浅部の地震活動は低調な状態で経過しました。
火山性微動は観測されていません。
- ・地殻変動の状況（図5）
GNSS連続観測では、アトサヌプリ西側深部での2021年秋以降の膨張を示すと考えられるわずかな変化は、2022年夏以降大きくなっており、その後も続いています。

この火山活動解説資料は気象庁のホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、北海道大学及び国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』、『電子地形図（タイル）』及び『基盤地図情報』を使用しています。

次回の火山活動解説資料（令和6年2月分）は令和6年3月8日に発表する予定です。

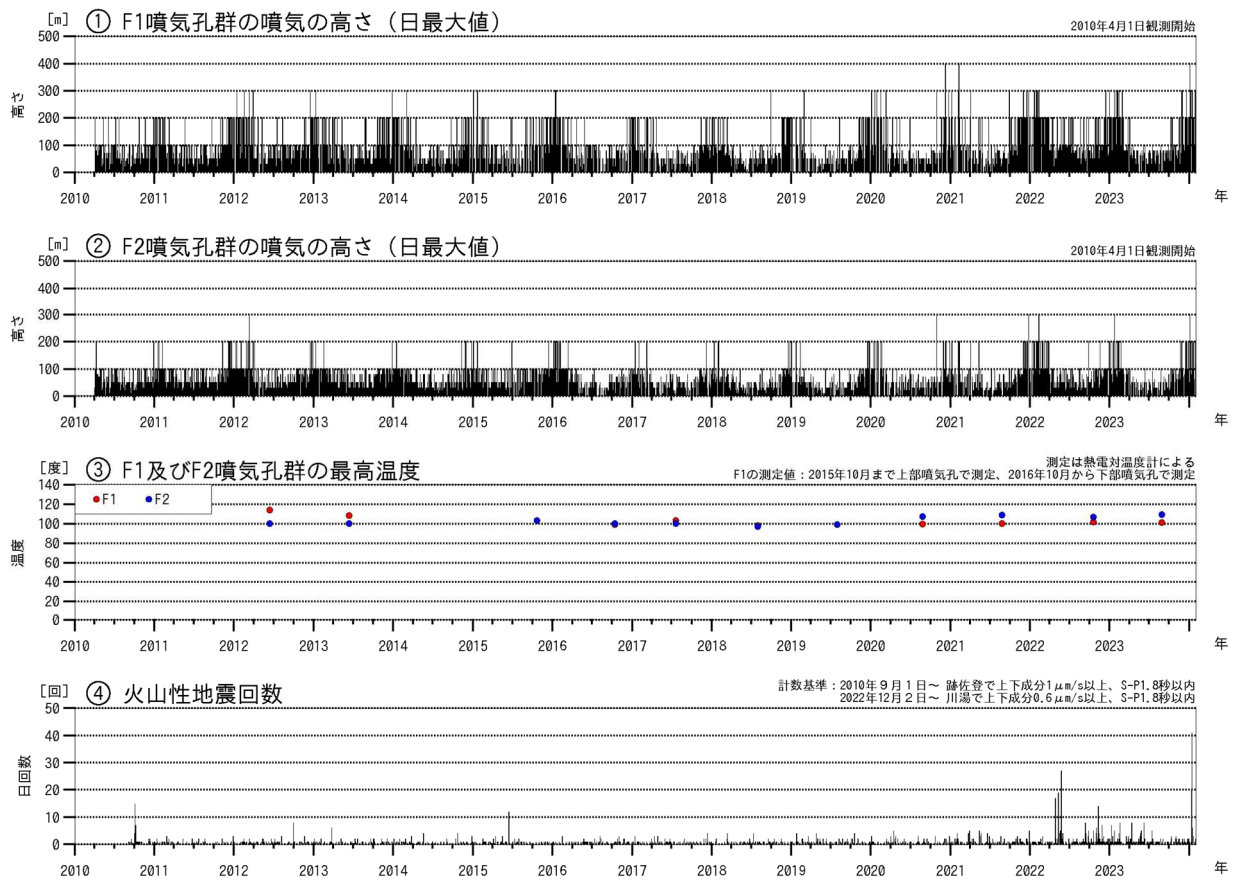


図1 アトサヌプリ 火山活動経過図 (2010年4月～2024年1月)



図2 アトサヌプリ 北東側から見たF1噴気孔群及びF2噴気孔群の状況 (北東山麓監視カメラによる)

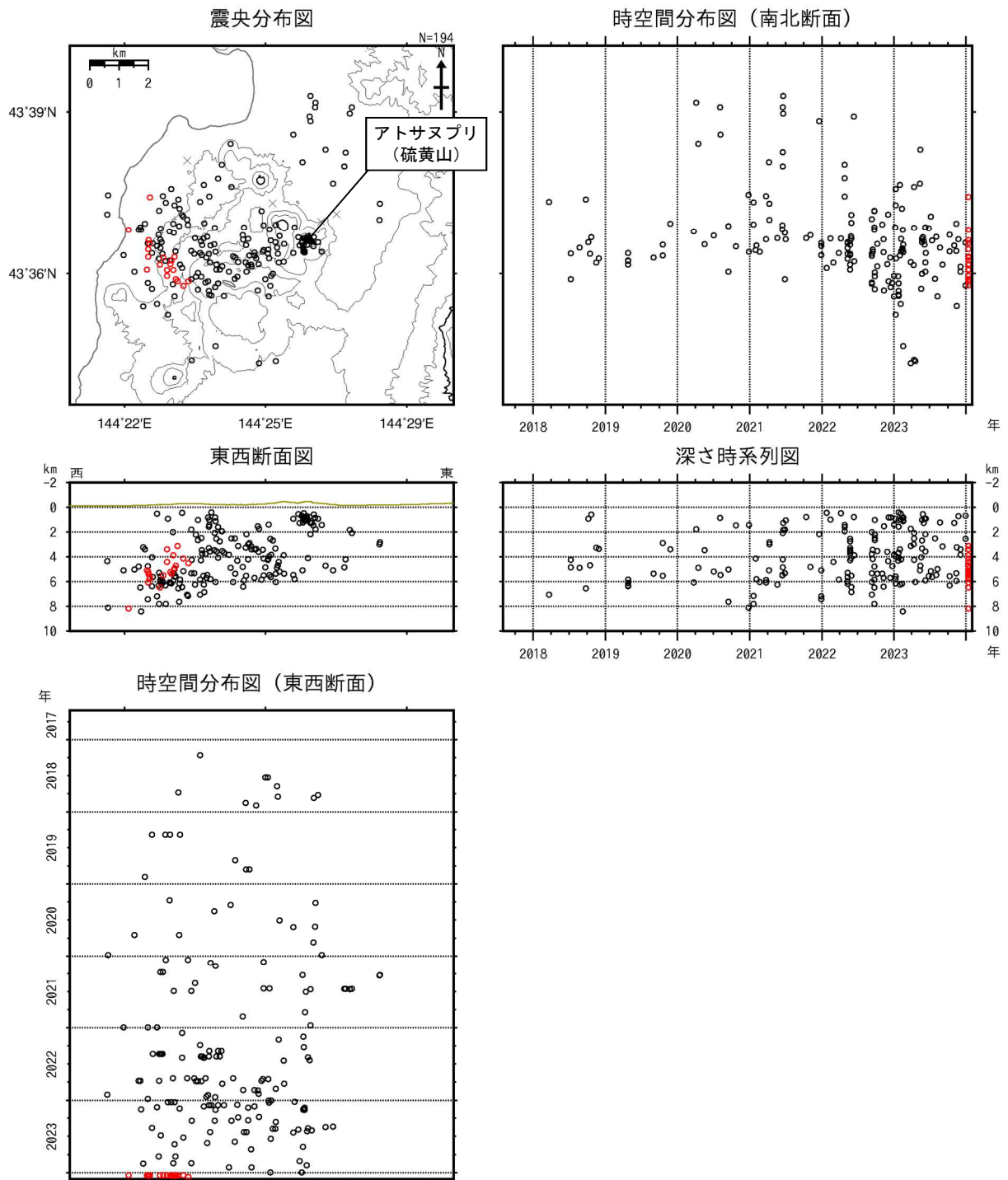


図3 アトサヌプリ 火山性地震の震源分布（2017年8月～2024年1月）

○：2017年8月～2023年12月の震源 ○：2024年1月の震源 ×：地震観測点

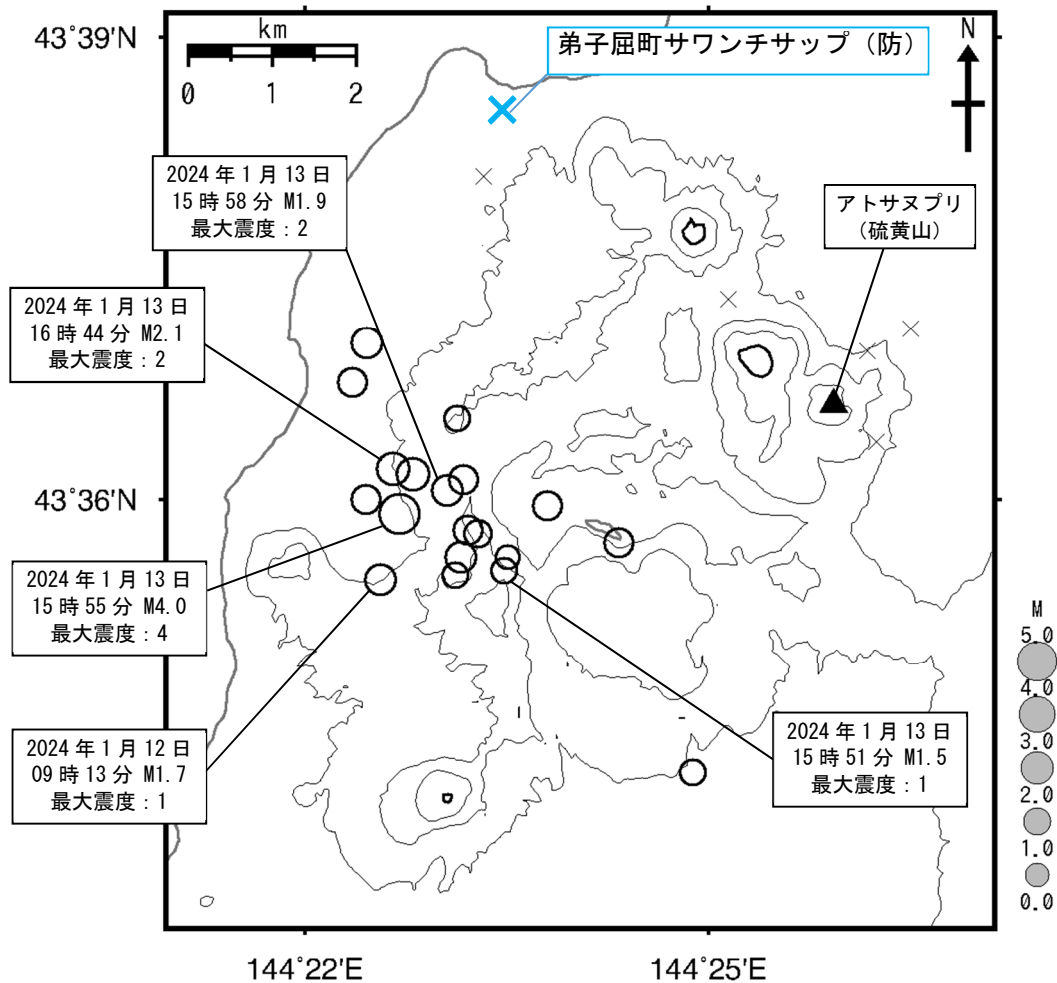
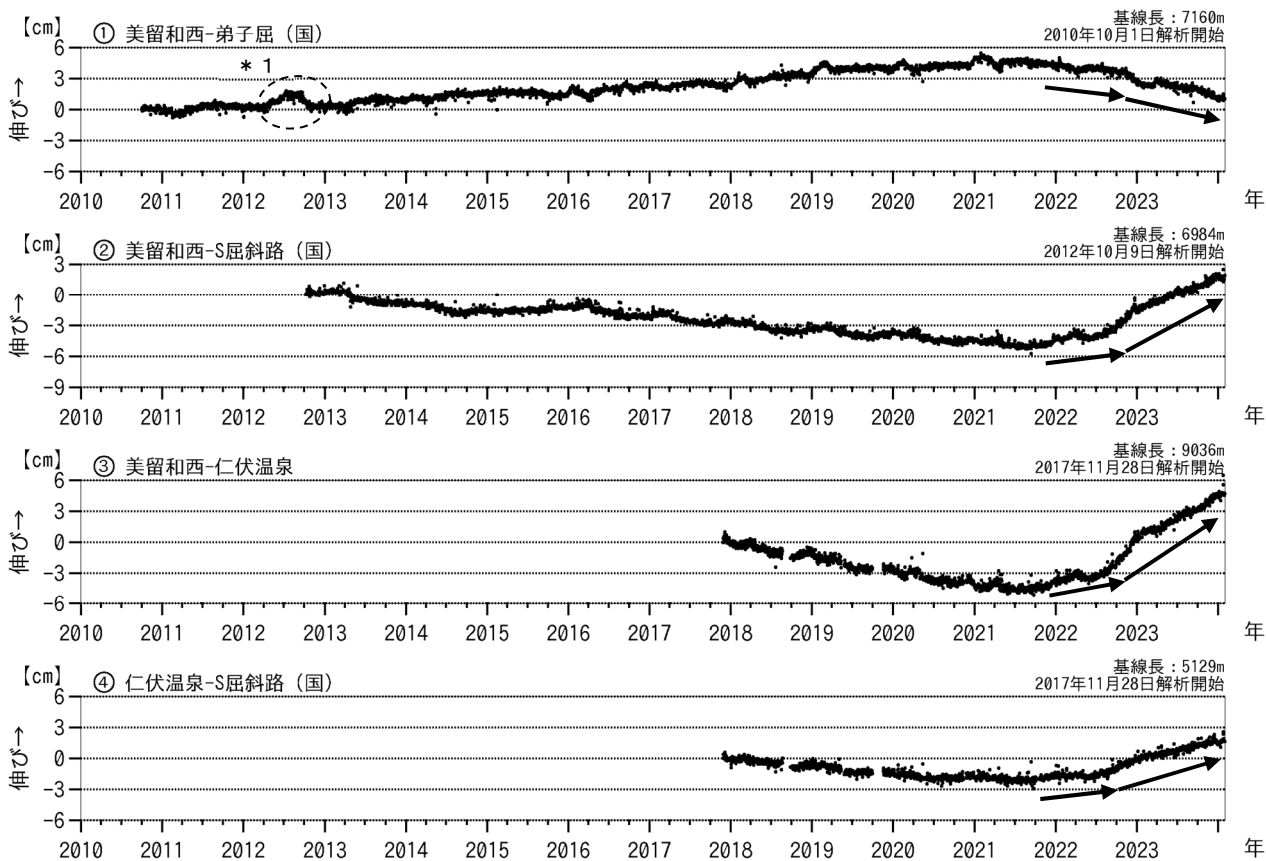


図4 アトサヌプリ 一元化震源によるアトサヌプリ周辺の地震の震央分布
(2024年1月、 $M \geq 0.0$ 、深さ15km以浅)

○：2024年1月の震源

(防)：国立研究開発法人防災科学技術研究所

- ・12日及び13日にアトサヌプリ西側で地震が一時的に増加し、そのうちの5回は弟子屈町サワンチサップ (x) で震度1以上を観測しました。



アトサヌプリカルデラの
 - - - カルデラ縁(勝井, 1958) * 2

図5 アトサヌプリ GNSS連続観測による基線長変化（2010年10月～2024年1月）及び観測点配置図
 冬季に凍上や積雪の影響によると考えられる変動がみられる基線があります。
 ①の破線内の変動（* 1）は、弟子屈(国)付近の樹木の影響及び伐採によるものです。
 グラフの空白部分は欠測を示します。
 * 2 勝井義雄（1958）阿寒・屈斜路火山群、地球科学、39巻。

・アトサヌプリカルデラを囲む基線②～④でみられている2021年秋以降の伸長の変化（矢印）は、2022年夏頃から大きくなっており、その後も続いています。

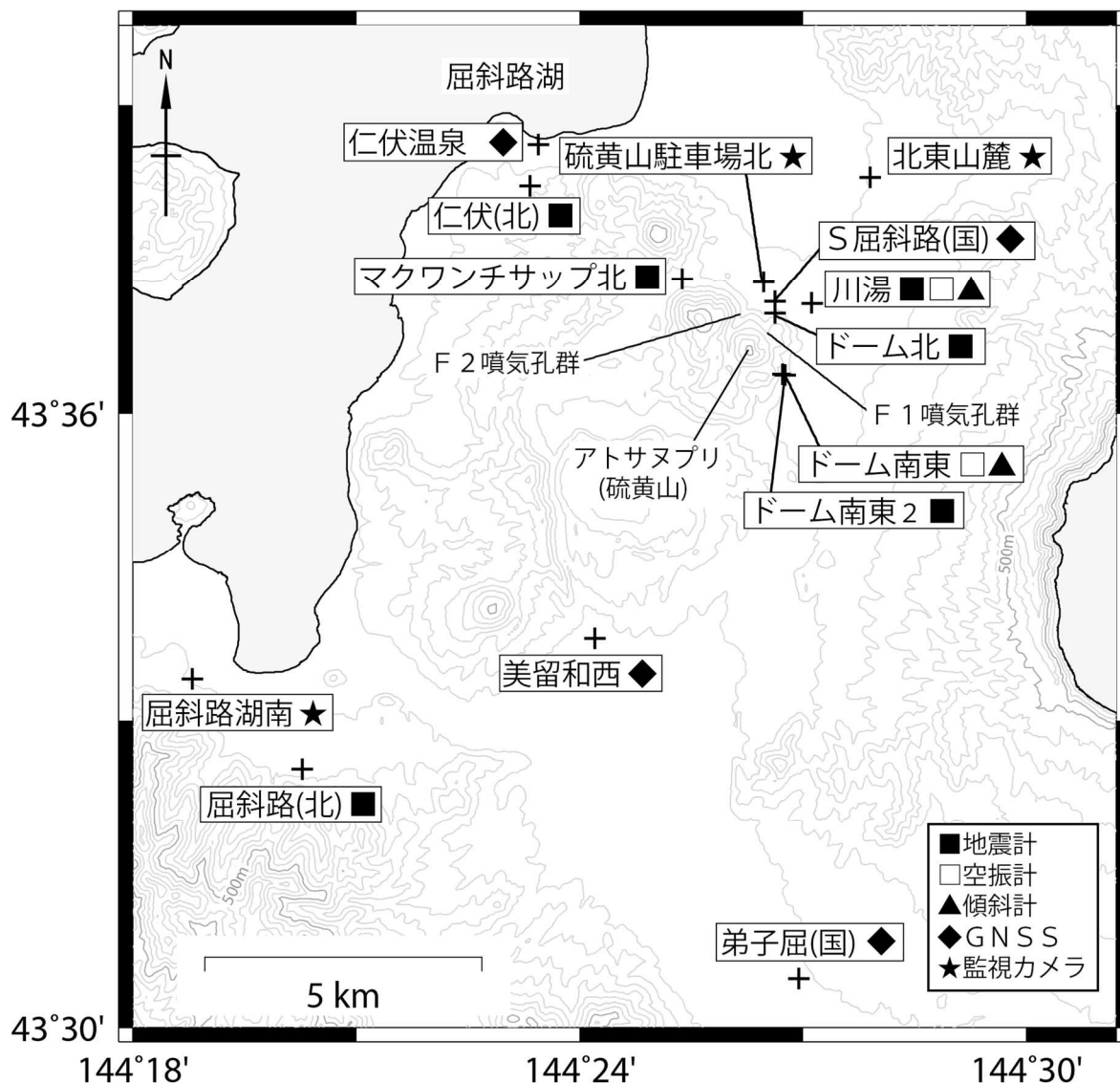


図6 アトサヌプリ 観測点配置図
 +は観測点の位置を示します。
 気象庁以外の機関の観測点には以下の記号を付しています。
 (国)：国土地理院
 (北)：北海道大学